資本制的生産様式における「労働疎外」の考究（二）

水谷謙治

はしがき
第一章　初期「労働疎外」論の概観……以上「立教経済学研究」第二十五巻第二号所載
第二章　資本制的生産様式における「労働の疎外」
　序　節　『資本論』の諸草稿における「労働疎外」の規定
　第一節　単純な商品生産における「労働疎外」の端初的形態
　　〔Ⅰ〕　商品に関する基礎的考察
　　〔Ⅱ〕　単純な商品生産における「労働疎外」の端初的形態……以上、本号所載
　第二節　「労働疎外」の現実的展開過程
　第三節　本章の総括
第三章　初期「労働疎外」論と『資本論』との関連

第二章　資本制的生産様式における「労働の疎外」

序　節　『資本論』の諸草稿における「労働疎外」の規定

前章では、マルクスにおける初期の「労働疎外」論が概観され、その特徴がつぎのように把握された。すなわち、

彼の初期「労働疎外」論は、「市民社会」の経済的諸関係あるいは経済的諸範疇を、主として労働者の人間的労働のありかたという立場から究明し、その転倒したありかたを「疎外された労働」としてとらえつつ、事実上で商品生産や資本制的生産に内在する敵対的性格を浮き彫りにしたものであり、また労働者階級の窮乏化をはじめとする現存社会のあらゆる矛盾の根源を私的所有と「疎外された労働」に（事実上での商品関係や資本家的関係に）求め、プロレタリアートによるその止揚すなわち彼らによる共産主義実現の理論的根拠を提供せんとしたものである、ということが明らかにされた。

本章では、資本制的生産における人間的労働のありかたが『資本論』やその諸草稿でどのように解明されているかを、「労働の疎外」という観点から考究する。このことによって、マルクスの初期「労働疎外」論と『資本論』との内容的な関連も明らかにされるに違いない。

ところで、『資本論』の諸草稿――『経済学批判要綱』[1]、『剰余価値学説史』[2]、『生産過程の直接的諸結果』[3]――をみると、そこには「労働疎外」に関する概念を端的にのべているいくつかの叙述が存在している。そこでまず、本章の考察の手掛りをうるために、これらの諸叙述を提示し、それらにみられる「労働疎外」概念の規定を簡単に要約しておくことにしよう。

（1）“Grundrisse der Kritik der Politischen Ökonomie” 1857-1858, Dietz（邦訳、高木幸二郎監訳〈大月書店〉。以下で引用するさいには“Grundrisse”『要綱』と略記する）。

（2）“Theorien Über den Mehrwert” M.E. Werke, B. 26（Ⅰ～Ⅲ）（邦訳、大月書店マル・エン全集第二六巻Ⅰ～Ⅲ、なお、引下で引用するさいには、“Mehrwert”『学説史』と略記する）。

（3）“Erstes Buch. Der Produktionsprozess des Kapitel, Resultate des unmittelbaren Produktionsprozess”（邦訳には

岡崎次郎訳〈大月書店〉をもちいる。引用にさいしては、"Resultate"『諸結果』と略記することにする)。

まず、『要綱』の叙述からみてゆくことにしよう(文中のゴチックは引用者による)。

引用Ⅰ、「**疎外のもっとも極端な形態**——賃労働に対する資本の関係で、労働が、労働自身の諸条件と労働自身の生産物とに対する生産的活動が現われるところのそうした形態は、一つの必然的な通過点であるということ、——そしてだからそれ自体で、転倒した、さかさまの形態にありながら、すでに生産のいっさいの狭隘な諸前提の解体をふくんでいること、そしてむしろ生産の無制約的な諸前提を創造し、生みだすということ、したがって個人の生産諸力の全面的な普遍的な発展にとっての十分な物質的諸条件を創造し、生みだすということ、これらのことは、あとになって考察されるであろう」(S. 414-415, 訳第一分冊、P. 451)。

引用Ⅱ、「労働力能は、過程に入ったときよりも豊かになっていないばかりか、むしろ貧しくなって過程から出てくる。……労働力能はたんに個人の富と自己の貧困とを生産しただけではなく、自己自身に関係する富としての富の、貧困としての生きた労働力能に対する関係をまた生産する。……いまやこの対象化された労働——労働力能の外部に存在する、労働力能の定在の諸条件、そしてこの物的諸条件の労働力能に対する自立的な外在性(Außerihmsein)——は、労働力能自身の生産物として、それ自身によって生みだされたものとして現われ、労働力能自身の客体化としても、また労働力能自身から独立して、むしろこれを支配する、それ自身の行為を通じて支配する力としても現われる」(Ibid, S. 356-357, 訳、p. 387-388)。「したがって労働の立場からみるならば、労働は生産過程で活動し、その結果客観的諸条件への自己の現実化を同時に他人の現実性として自分からつきはなし、それゆえにまた、**労働からは疎外され**て労働にでなく、他人に属するこの実在に対立して、自分自身を実体のな

い、たんに窮迫した労働力能として措定することになる。その結果また、労働は自分自身の現実性を対自的存在としてではなく、他人のためのたんなる存在として、……措定することになる。この労働の現実化過程（Vernirklichungsprozeß）は、同じくその非現実化過程（Entwirklichungsprozeß）である」（Ibid, S. 357-358, 訳、p. 389）。

引用Ⅲ、「これは賃労働にとって重要なことであるが――労働の客観的諸条件が生きた労働に対して、まさにその大きさによって示されているようなますます巨大な自主性をうけとり、そして社会的な富が圧倒的な部分においては、労働に対して、疎遠な・支配する力（Entfremdet・Herr・schafts-Macht）として対立するというように現われるのである。**力点は対象化されていることにではなく、疎外され、外化され、譲渡されていること**（Entfremdet, Entäußert-, Veräußertsein）におかれ、社会的労働自体がその諸契機の一つとして対立させられる巨大な対象的な力が、労働者自身に属するのではなく、人格化された生産諸条件に、すなわち、資本に属しているということにおかれているのである。資本および賃労働の立場にもとづいてこの対象的な活動体の生産が直接的労働力能に対立しておこなわれる限りでは――**この対象化の過程は労働の立場からは事実上外化の過程**（Entäußertsprozeß）として、また資本の立場からは他人の労働の領有の過程として現われる――、**このねじまげや転倒は、現実的なもの**であって、たんに考えられたもの、労働者と資本家の表象のうちにだけ存在するものではないのである。しかし、この転倒過程は正に歴史的な必然性であり、一定の歴史的出発点あるいは土台から生産力が発展してゆくための必然性にほかならないのであって、決して生産の絶対的な必然性ではない。……ブルジョア経済学者たちは、社会の一定の歴史的発展段階の表象のなかにふかく追い込まれているために、労働の社会的諸力の対象化の必然性は、彼らの眼には生きた労働に対立してのそれらの**疎外の必然性**と分離できないもののようにみえ

るのである」(Ibid, S. 715-716, 訳、第四分冊、p. 795)。

つぎに、『剰余価値学説史』から引用することにしよう。

引用I、経済学において「……労働が交換価値の唯一の源泉および使用価値の能動的な源泉として把握されるにつれて、それと同じ度合で『資本』は同じ経済学者たちによって、またことにリカードによっても(彼よりもあとのトレンズやマルサスやベーリなどによってはさらにそれ以上に)、生産の調節者、富の源泉、生産の目的として把握される。これに対して、労働は賃労働として把握され、その担い手は必然的な貧困の現実の用具……であって、最低限の賃銀に頼って生活し、それが資本にとって『過剰な』量で存在するようになれば、賃銀はさらにこの最低限よりも低く下がらざるをえない。この矛盾において経済学が言い表わしたものは、ただ、資本主義的生産の、言い換えれば、賃労働の、本質であるにすぎない。**この賃労働は自己疎外された労働**であって、それに対しては、それによってつくりだされた富が他人の富として対立し、それ自身の生産力がそれの生産物の生産力として対立し、それの致富が自己窮乏化(Selbstverarmung)として対立し、それの社会的な力がそれを支配する力として対立するのである。ところが、このような、資本主義的生産において現われるところの、**社会的労働の特定の独自な歴史的な形態**を、これらの経済学者たちは、一般的な永久的な形態と……して言い表わし、またこのような諸関係を、社会的労働の絶対的な(歴史的ではない)必然的な、合自然的で理性的な諸関係として言い表わすのである。資本主義的生産の視野のなかに完全に閉じこめられているために、彼らは、社会的労働がここでとるところの対立的な形態を、この対立から解放されたこの形態そのものと同様に必然的なものと断定するのである」("Mehrwert" III, S. 255, 訳〈III〉、p. 339-340)。

引用Ⅱ、「労働の一定の社会的形態の作用が、この労働の生産物である物のおかげだとされ、関係そのものが物的な姿で幻想される。われわれがみたように、これは、商品生産にもとづき交換価値にもとづく労働の一つの独自な特徴なのであり、また、商品や貨幣におけるこのような取り違え（これをホジスキンはみていない）が、資本ではさらにいっそうひどくなって現われるのである。諸物が労働過程の対象的な諸契機としてもっている諸作用が、それらの人格化、労働に対するそれらの独立性においてそれらがもつものとして、資本としてのそれらに属するものとされるのである。もしこれらの物がこのような**疎外された形態**（Entfremdet former）において労働に相対することをやめるならば、これらの物はこのような諸作用をもたなくなるであろう。資本家は資本家としてはただ資本の人格化でしかなく、労働に対立してそれ自身の意志や人格を授けられている労働の被造物でしかない。ホジスキンはこれを、その背後に搾取する諸階級の欺瞞や利害が隠されているまったく主観的な錯覚として把握している。彼は、このような考え方の根源が現実の関係そのものにあるということ、後者が前者の表現なのではなくてその逆であるということをみぬいていない」（Ibid, S. 290, 訳、p. 384-385）。

つぎは『直接的生産過程の諸結果』からの引用である。

「資本家が行なう諸機能は、ただ、資本――生きている労働の吸収によって自分を増殖する価値――そのものの諸機能が意識と意志とをもって行われるものであるにすぎない。資本家はただ人格化された資本としてのみ機能するのであり、人としての資本なのであって、それは労働者がただ人格化された労働としてのみ機能するのと同様である。この労働は、労働者のものとしては苦痛であり骨折りであるが、資本家のものとしては富を創造し増殖する実体である。そして、労働は、生産過程で資本に合体された要素としては、生産過程の生きている可変

的な要因としては、実際にこのようなものとして現われるのである。それゆえ、労働者に対する資本家の支配は、**人間に対する物の支配**、生きている労働に対する死んだ労働の支配、**生産者に対する生産物の支配**なのである。なぜなら、労働者に対する支配の手段（……）となる商品は、実際、生産過程の単なる結果であり、その生産過程の生産物であるからである。これは、観念形態の領域において宗教のなかに現われる関係、すなわち主体の客体への転倒およびその逆の転倒という関係とまったく同じ関係が、物質的生産において、現実の社会的生活過程――というのはそれが生産過程なのだから――において、現われているものである。歴史的にみれば、このような転倒は、富そのものの創造を、すなわち、ただそれだけが自由な人間社会の物質的基礎を形成しうる社会的労働の無容赦な生産力の創造を、多数者の犠牲において強要するための、必然的な通過点として現われる。このような対立的な形態を通らなければならないのは、ちょうど、人間が自分の精神的諸力をまず第一に自分に対立する独立な諸力として宗教的に形づくらなければならないのと同じことである。**それは人間自身の労働の疎外過程である**。この点では労働者ははじめから資本家よりも高い立場にある。というのは、資本家はこの**疎外過程**に根をおろしてこの過程のなかで自分の絶対的な満足をみいだすのであるが、労働者の方はこの過程の犠牲としてはじめからこの過程に対して反逆的な関係に立っていてこの過程を隷属化の過程として感ずるという限りにおいて、そうなのである」（"Lesultate" S. 466, 訳、p. 32-33）。

以上の諸引用をみるならば、これらの諸叙述においては、「労働の疎外」あるいは「労働の自己疎外」という概念は、労働者が生産手段から分離され、彼の労働力が商品として資本家に譲渡される結果、彼の労働力が資本の一要素

になり、労働諸条件に従属した労働になること、労働の生産物が労働主体に属さずに資本家のものになり、逆に資本として独立化して彼を支配するようになること、労働の生産力が資本の力として現われ、その発達が労働者の資本への隷属と犠牲として現われること、を表わしていることがわかる。したがって一言でいうならば、この概念は、資本制的生産の転倒した性格を、労働者の人間的労働のありかたにそくしてとらえた概念であり、したがってまた、賃労働は「疎外された労働」にほかならない。

以下の叙述では、『資本論』[4]とその諸草稿にもとづいて、こうした「労働の疎外」に関する多少とも詳しい考察をおこなうことにしよう。

（4）"Das Kapital" M.E. Werke, B. 23-25, Dietz Verlag, 1969, 訳、〈大月書店〉、マルクスエンゲルス全集第二三巻―第二五巻、（以下の叙述で引用を行うさいには、Kという記号を用い、訳はすべて右のものからとする）。

第一節　単純な商品生産における「労働疎外」の端初的形態

〔I〕商品に関する基礎的考察

（一）

当面する課題を研究するにあたって、最初に単純な商品生産の考察から始めるのは、単純な商品生産が歴史的にみても理論的にみても、資本制的生産の出発点あるいは基本的前提をなしているからであり、単純な商品生産において、すでに資本制的生産における「労働疎外」の端初的形態が析出されうるからである。

なお、ここに単純な商品というのは、資本制的生産の産物としての商品ではない商品、資本制的関係をふくんでい

ない商品のことである。その限りでそれは、歴史的には前資本主義的諸社会に実在していた商品であるが、ただし奴隷制的、封建制的諸関係を捨象し純粋にとりあつかわれる限りでの商品である。他方、資本制的社会の富の基本的形態をなしている個々の商品も、資本制的諸関係を捨象せられた単なる商品だという限りでは、それは右の単純な商品と共通した規定をうけとるから、その限りでは同じ商品とみなすことができる。(5)(6)

(5) この点に関しては、さしあたりマルクスとエンゲルスのつぎの叙述を引用するに留めておく。

「われわれは、商品から、この独自に社会的な生産物形態——資本主義的生産の基礎および前提としてのそれ——から、出発する。われわれは、個々の生産物を手にとって、それが商品として含んでおり、それに商品の極印を押すところの、いろいろな形態規定性を分析する。資本主義的生産以前には、生産物の一大部分は、商品として生産されるのではなく、商品になるために生産されるのではない。他方では、当時は、生産にはいって行く生産物の一大部分は、商品ではなく、商品として生産過程にはいるのではない。生産物の商品への転化は、ただ個々の地点で行われるだけであり、ただ生産の余剰や個々の生産部面(製造工業生産物)などに及んでいるだけである。……それにもかかわらず、ある限界のなかでの商品流通および貨幣流通は、したがってまたある程度の商業の発展は、資本形成および資本主義的生産様式への前提であり、出発点である。**われわれは商品をこのような前提として取り扱う、というのは、われわれは資本主義的生産の最も単純な要素としての商品から出発するからである**」(“Lesultate,” S. 444, 訳、p. 151 ゴチックは引用者)。

「ひと言でいえば、マルクスの価値法則はおよそ経済法則というものが妥当する限り、**単純商品生産の全時代**にわたって、**すなわち資本主義的生産形態の出現によって単純商品生産が変化させられる時まで**、一般的に妥当するのである。それまでは、価格は、マルクスの法則によって規定される価値に向って引きつけられ、この価値を中心として振動するのであり、したがって、単純商品生産が十分に発展すればするほど、それだけますます、外部の暴力的攪乱によって中断されない比較的長い期間の平均価格は、無視してもよいひらきの範囲内で価値と一致するのである。こうして、マルクスの価値法則は、生産物を商品に転化させる交換が始まってから一五世紀に至るまでの期間にわたって、経済的一般的妥当性をもつものである」(“Ergänzung und Nachtrag zum Ⅲ. Buche des, Kapital”. M. E. Were, 25, S. 909, 訳、マルクスエンゲルス全集〈大月書

店〉第二五巻、p. 1148 ゴチックは引用者）。

(6) 念のためには付言しておけば、ここでは、単純な商品生産と同時に単純な商品生産社会を想定することになるが、そのさいの「社会」とは「経済構造からみた社会」（K. Ⅲ, B. 25, S. 827）、つまり生産担当者たちが自然に対しても彼ら相互に対しても取り結ぶところの諸関係の総体としての社会、を意味する。「社会」をこの意味で把えれば、ある一国で自足的経済が支配的であったとしても、個々の地域の諸個人が、彼らのたえざる再生産にとって不可欠な生産物の一部分を商品経済に求めざるをえない限りでは、彼らの取り結ぶ商品経済関係の全体が一社会を構成することになる。

（二）

まず、商品――以上に明らかにした意味での単純な商品――についての基礎的な理解を、ごく簡単にとりまとめておくことにしよう。

商品生産を特徴づける根本的関係は、独立した私的生産者たちが生産手段を私的に所有して社会的分業をいとなんでいるという関係である。

すなわち、この社会では、個々の生産者がなんらかの身分的隷属や強制関係をしいられているのではなく、自分の意志と必要にもとづいて自分の所有する生産手段で独立に労働をして生産物を取得しているのであって、このことを社会全体としてみれば、あらゆる生産的労働が多種多様な種類の労働に無計画に分割され、それに応じて生産物が特殊な職業に局限された個々人の私的労働の産物として自然発生的に生産されていること――要するに無計画的な社会内分業が行われていること――にほかならない。

したがって、この社会では、個々人は自己の労働を通じて取得した自分の生産物を他人に譲渡（Entäußerung）する

以外には、種々の他人の生産物を領有(Aneignung)することができず、生存してゆくことが不可能である。これにくらべて、原始共同体的社会や奴隷制的あるいは封建制的社会では、生産者は生産が開始される以前に上記のような特定の社会関係に制約されており、この制約をうける限りでは彼の労働もその生産物も最初から、共同体のもの、奴隷主のもの、領主のものという極印をおされている。だから、私的生産物の譲渡による他人の生産物の領有、私的交換、ということは生じえない。

右のように、社会の諸成員が自己の生産物を他人に譲渡する以外に必要な諸生産物を取得しえないという事実は、個々人の生産物が自分にとっての使用価値ではなく他人のための使用価値でなければならぬということと同時に、この生産物が交換によって他人の生産物を領有するための「役立ち」をもっているということ、つまり交換価値をもっているということをも意味している。周知のように、使用価値と交換価値を有するこうした生産物は商品にほかならない。したがって、生産物に商品という性格を付与するのは、諸生産物の私的交換を不可欠にする条件、つまり、社会的分業が、生産手段を私有する独立した私人の労働として無計画的に行われていること、一言でいえば、私的所有と結合した自然成長的な社会的分業にほかならない。

(三)

ところで、商品の使用価値は、人間にとっての有用性という生産物に固有の自然的性格であるから、これをそれ自体としていくら調べてみても商品の独自的諸性質を解明することはできない。問題は交換価値の側にある。

日々くりかえされる無数の交換という事実は、多種多様な相異なる諸使用価値が特定の比率で等置されていること

にほかならない。だからこの事実は、特定の比率の諸使用価値のあいだに、使用価値とは区別されるある共通した内実が存在していることを示している。ではこの共通の内実はなにかというと、それは種々の使用価値の相違を捨象し、したがってこれらの使用価値をつくる労働の独自な具体的、有用的性質を捨象したところに存在するのであるから、それは同じ人間労働の産物・抽象的一般的労働の結晶・だということになる。そしてかかる抽象的人間労働の結晶が商品の価値である。それゆえ、さしあたりある一種類の使用価値が他の種類の諸使用価値と交換される量的比率として現象するところの交換価値に共通な内実とは価値であり、この価値の実体は抽象的人間労働である。

それゆえ、商品が使用価値と交換価値という二面的なものだということは、商品をつくる人間労働が、使用価値をつくる具体的有用労働と価値をつくる抽象的労働という二面的性質をもっていることを意味している。

ある使用価値をつくるさい、その有用的効果という視点から観察され、その有用性が生産物の使用価値で表示される労働が有用的労働であるが、かかる特殊な有用的労働の全体的編成が社会的分業を形成する。（社会的分業とは、その素材的側面から使用価値を生産する労働としてつかまれた社会的労働の総姿態のことである）だから社会的分業は、商品生産の一般的存在条件をなすとはいえ、それが必ず商品生産として行われるわけではない。前述したように、生産手段を私有する独立した生産者の私的諸労働として行われる限りでの自然発生的な社会的分業だけが商品生産になるのである。

他方、価値を形成する限りでは、労働はその独自的有用性やその具体的性格をすべて捨象されている。この捨象後に労働に残ることといえば、それは人間の脳、筋肉、神経、手等々の総体たる労働力の単なる支出だということである。このように、価値を形成する労働が無差別な人間労働一般だということは、かかる労働を支出する労働力が社会

的に同じ労働力として意義をもつということ、あるいは、相異った個々の労働が価値をつくる労働としてはすべて同質の労働に還元されるということを意味している（右の質を規定する契機は、社会の標準的生産条件のもとでの労働の熟練と強度である）。

それゆえ、商品価値の大きさは、価値の実体をなす労働分量によって決定され、労働分量はまた労働の継続時間によって度量される。そのさい、かりにある不熟練労働者が一つの商品をつくるのに社会的にみた平均時間よりも多くの労働時間を要費したとしても、社会的に（市場では）、彼の労働はこの種の商品をつくる他と同じ平均質の労働に還元され、彼の商品価値の大きさは右の平均労働の支出分――「現存の社会的に正常な生産条件と、労働の熟練および強度の社会的平均度とをもって、なんらかの使用価値を生産するのに必要な労働時間」の長さ――としてしか「通用」しない。(7)(8)

(7) 相当高度の商品生産社会での社会的平均労働力は、誰でも普通の人間が特別の発達なしに、自分の肉体のうちにもっている単純な労働力であるが、それは生産者の再生産に必要なよりも相当に多くの生産物を提供しうる程度にまで発達した段階にある労働力だということを前提にしている。

(8) K. I, B. 23, S. 53（訳、p. 53）。また、商品価値の大きさが社会的に必要な労働時間で決るということから、価値の大きさは労働生産力の変動に反比例することがわかる。

（四）

つぎに、商品が価値物だということが交換でどのように表現されるかという点について――。たとえば、

20エルレの亜麻布＝1着の上着

という交換で、亜麻布は自分の価値をどのように表現するであろうか？　それは、亜麻布がまず上衣を自分と「直接に交換されうるもの」として等置し、上衣をつくる裁縫労働を亜麻布の織物労働に等置することによってであり、ついでそのことによって、裁縫労働を人間労働一般という共通の性質に還元してこの人間労働（価値形成労働）が上衣で表わされるということを明らかにしたうえで、この価値物たる上衣の姿で自分の価値を表現するという仕方によってである。要するに、まず上衣を自分に等置し、上衣に価値物という規定を与え、上衣の自然姿態がそのまま価値を表わすものとしたうえで、この上衣で自分の価値を表現するわけである。このさい、亜麻布は相対的価値形態にあり、上衣は等価形態にある。

だから等価形態にあっては、使用価値が価値の現象形態に、具体的有用労働が抽象的人間労働の現象形態に、さらに私的労働が直接社会的形態にある労働になっている。なお、さきの例のような個別的で最も簡単な価値表現においては、上衣は偶然に一つの商品に対して等価形態にたつのみであるが、商品交換の発展は、交換過程の矛盾(9)を媒介にしてやがてある一種類の商品（金）に等価形態を押しつけ、この商品で他のすべての商品の価値を表現させるようになるのであって、かかる商品（金）が貨幣にほかならない。

(9)　ここでいう交換過程の矛盾とは、主として、商品の使用価値としての実現と価値としての実現との矛盾、つまり、商品は使用価値として実現されるまえに価値として実現されねばならないが、他方、商品は自分を価値として実現しうるまえに自分を使用価値として実証してみせねばならぬという矛盾を意味している。この矛盾を生産者間の関係としてみるならば、それは、どの生産者も自分の生産物は誰の手にわたってもよい（むしろどんな人の手にもわたるべき）価値物として妥当させようとする一方、他人の生産物についてはあくまで自分の欲する特定の使用価値だけを要求するということ（このことがあらゆる生産者の関連において現われるならば交換が行き詰まらざるをえない）としてとらえられる。この矛盾は、交換において種々

の商品がそれらに共通する同じ第三の商品と交換され（価値として比較され）、この第三の商品が他のすべての商品の一般的等価物になることによって解決される。

（五）

さらに、商品は社会的労働の独自性という観点からも観察されねばならない。本来、社会諸成員の労働は社会を支える社会的労働であり、なんらかの社会的形態をもって行われざるをえないが、問題はこの必然性が、商品生産のもとでどのような独自的形態で貫徹するかという点にある。

商品生産の根本的条件は、独立した私的諸労働が社会的分業を形成しているということであった。このことは、使用価値の面からみれば、個々の生産者が種々の欲望を満すための使用価値を提供しつつ相互に依存しあっていること、したがって彼らの有用労働が社会的総労働の一分子をなしているということである。だが、彼らの労働は、もっぱら私的利益を目的とした私的な労働としてのみ行われている。つまり、商品生産者の労働は、一方では社会的労働（社会的総労働の一分子）でなくてはならぬのに、直接には私的労働でしかないという矛盾を内包せざるをえない。したがって、このことから生じてくる問題は、私的労働としてのみ行われる彼らの労働がいかにして社会的労働であるのか、このことがどのようにあらわされるのか、ということである。

この課題の現実的解決は、商品生産者たちが、一方では彼らの具体的有用的労働を諸生産物として「物化」（Versubjektivierung）させ、この物を市場で交換することを通じてそれが他人にとっての有用物だということを実証することによってはたされ、他方では同時に、その同じ交換において、彼らの労働生産物が交換価値をもち、諸使用価値

の相違にかかわりない同等な人間労働の結晶としてやはり社会的労働だということを実証することによってはたされる。換言すれば、彼らの私的労働の二重の社会的性格――社会的な有用性と人間労働一般としての共通性――は、諸商品の交換において商品が他人のための使用価値であり、かつ交換価値をもっているということによって表示され、実証されるのである。(10) ポイントは、人間的労働が商品という物的形態をとり、人間の社会的関係が交換によるそれらの物と物との関係を媒介せざるをえないという点に存在している。生産者たちは、彼らの労働生産物の交換を通じて初めて社会的に接触するようになるのだから、彼らの私的労働の独自な社会的性格もまたこの交換で始めて現われるのである。だから交換過程は、私的労働が社会的労働になり、さきの課題が解決される現実的な「場」だと表現できる。

(10) 交換が十分に発展すれば、「……生産者たちの私的諸労働は事実上で二重の社会的性格をうけとる。それは、一面では、一定の有用労働として一定の社会的欲望を満さなければならず、そのようにして自分を総労働の諸環として、社会的分業の自然発生的体制の諸環として、実証しなければならない。他面では、私的諸労働がそれら自身の生産者たちのさまざまな欲望を満足させるのは、ただ、特殊な有用な私的労働のそれぞれが別の種類の有用な私的労働のそれぞれと交換可能であり、したがってこれと同等と認められる限りでのことである。……私的生産者たちの頭脳は、彼らの私的諸労働のこの二重の社会的性格を、実際の交易、生産物交換で現われる諸形態でのみ反映し、――したがって、彼らの私的諸労働の社会的に有用な性格を、労働生産物が有用でなければならないという、しかも他人のために有用でなければならないという形態で反映し――、異種の諸労働の同等性という社会的性格を、これらの物質的に違った諸物の……共通な価値性格という形態で反映するのである」(K. I, S. 87-88, 訳、p. 99)。

ここで注目すべき点は、商品生産者が生産物を相互に価値物として関連させているのは、彼らが、これらの生産物を彼らにとって同じ人間労働の単なる物的外皮だと承認しあっているからではないという点である。彼らが独立した

私的生産者として無計画的な社会的分業体制にくみこまれているということが、彼らをして生産物の交換を不可避にさせ、この交換が彼らの相異なる諸労働を同じ人間労働として等置させるのである。より詳しくいえば、この交換が、彼らの労働の同等性を商品の価値という物的形態で表わし、時間によって尺度される労働量を価値の大きさで表わし、労働における彼らの社会的関係を諸商品の関係という物的な諸関係で表わすのである。そしてこの点にこそ、商品形態の特質あるいは商品の物神的性格が存在しているのである。商品あるいは価値という形態は、生産物の素材で表わされた社会的労働の独自的な性格ないし生産の社会的関連にほかならない。

なお、商品の価値量（「物化」した人間労働の分量）の変動は、生産者の意志や予知や行為からは独立した運動であって、逆に人間がこの物の運動によって制御される。それはけだし、商品の生産に必要な社会的労働時間への平均化は、彼らのあずかり知らない種々の生産諸条件の多様な諸変化をふくんで行われ、私的諸労働の生産物の偶然的な交換比率を通じてのみ行われるからであり、この価値量の大小に応じて生産者の「取り分」が――したがって彼らの再生産が――規定されるからである。相互にばらばらに独立して営まれつつ、しかも社会的総労働の一分子として完全に依存しあわねばならぬ私的諸労働が、社会的に平均化されるのは、かかる仕方による以外にはないのである。

こうして、私的交換にもとづく労働を特徴づけているのは、労働の社会的性格が、商品という事物の属性として現われ、生産の社会的関係が物と物との社会的関係として現われ、物が主体となって勝手な運動を行ない、これに人間が制約されることとして現われるということである。このことは、商品の物神的性格とともに、「人格の物象化」(Versachlichung der Personen) およびその発展としての「物象の人格化」(Personifizierung der Sache) としても表わされる。ここでは、宗教に現われる主体の客体への転倒およびその逆の転倒と同じ関係が、現実の生活において現わ

れているわけである。[11]

(11)「一つの社会的生産関係が諸個人の外部に存在する一対象としてあらわされ、また彼らがその社会生活の生産過程で結ぶ一定の諸関係が、一つの物の特有な諸性質としてあらわされるということ、このような転倒と、想像的ではなくて散文的で実在的な神秘化とが、交換価値を生みだす労働のすべての社会的形態を特徴づける」（Zur Kritik der Politischen Ökonomie, M.E. Werke, B. 13, S. 34-35,〈大月書店〉全集訳、p. 33）。

「すでに商品のうちには……資本主義的生産様式の全体を特徴づけている社会的生産規定の物化も生産の物質的基礎の主体化もふくまれている」（K. Ⅲ, B.25, S.887, 訳、1125）。

「……生産者たちにとっては、彼らの私的諸労働の社会的関係は、そのあるがままのものとして現われるのである。すなわち、諸個人が自分たちの労働そのものにおいて結ぶ直接に社会的な諸関係としてではなく、むしろ諸個人の物的な諸関係および諸物の社会的な諸関係として、現われるのである」（K. I, B.23, S.87, 訳、p. 99）。

「商品に内在する使用価値と価値との対立、私的労働が同時に直接に社会的な労働として現われなければならないという対立、特殊な具体的労働が同時にただ抽象的一般的労働としてのみ認められるという対立、物の人格化と人格の物化という対立――この内在的矛盾は商品変態の諸対立においてその発展した運動形態をうけとるのである」（K. I, B.23, S.128, 訳、p. 150）。

なお、完成した商品形態たる貨幣は、私的労働の社会的性格をいっそう物的におおいかくすのであって、最も簡単な価値形態においてすら、一商品の価値がある特殊な自然素材に固有な属性として現われるのに対して、このばあいには、すべての諸商品の価値が一個の特殊商品（金）の素材で表示され、一般的等価機能が金素材の自然形態と癒着するのである。だから金は、生れながらにして一切の人間労働の直接的化身として現われる。

〔Ⅱ〕 単純な商品生産における「労働疎外」の端初的形態

（一）

さて、すでに明らかにされたように、「労働を対象として疎外する」ということは、労働の生産物が労働主体に対して無縁で対立的な性質を有するものとして独立化すること、あるいは、労働の対象化が単なる対象化に留まらず、対象化が主体に対立した疎遠な事物として独立化するということであった。

したがって、単純な商品生産において、人間労働の社会的性格が商品という物的形態をとり、主体に対して「疎遠な」一事物として独立化し、この事物の独自な運動によって主体の再生産が制約されるということは、商品生産者が彼らの労働や社会的関連を対象として疎外しているということにほかならない。

それゆえにまた、商品（および貨幣）という物的形態は、生産物の疎外された形態であり、労働生産物が生産者から疎外されるということが、それらの物が物神的性格をもつということなのである。

マルクスが、商品の解明にあたって、「しかし彼（フランクリン――引用者）は、交換価値にふくまれている労働を……個人的労働の全面的外化から生ずる社会的労働として展開しなかった」[12]とのべたり、「貨幣が一つの社会的性質をもちうるのは、個人が彼ら自身の社会的関連を、対象として自分自身から疎外しているからにすぎない」[13]とのべたり、あるいはまた、「古典派の、したがって批判的な経済学者にとっては疎外の形態が厄介な問題であって、彼らは分析によってそれをぬぎすてようとする……」[14]とのべているのも、以上の意味において理解することができよう。

（引用文の傍点は引用者による）。

したがって、生産物の疎外された形態の解明は、商品、貨幣、資本等の「物神性」の解明（あるいは「生産関係の物化や独立化」の解明）にほかならない。このことは、『資本論』においては、商品から利子生み資本にいたる「物神性」に関する多くの叙述において明示されており、またその諸草稿においてもそうである。以下、そのいくつかを例示しておこう。

「資本が労働条件の疎外された形態を、一つの独自に社会的な関係を表わしている」[15]、「資本の力、すなわち社会的生産条件が現実の生産者に対して独立化され資本家において人格化されたもの……それは疎外され独立化された社会的な力であり、この力が物として、またこのような物による資本家の力として、社会に対立する」[16]、「……経済的三位一体では、資本主義的生産様式の神秘化、社会的諸関係の物化、物質的生産諸関係とその歴史的社会的規定性との直接的合性が完成されている。……現実の生産当事者たちがこの資本―利子、土地―地代、労働―労賃という疎外された不合理な形態ではまったくわが家にいるような心安さをおぼえるのも、やはり当然のことである」[17]、「労働から疎外された、労働に対して独立化された……労働条件の姿、つまり、その姿では生産された生産手段は資本に転化しており、土地は独占された土地すなわち土地所有に転化しているという姿、このような、一定の歴史時代に属する姿が、生産過程一般での生産された生産手段および土地の定在[18]および機能と一致するのである」、等々。

(12) "Kritik" S. 42（訳、p. 41）。なお、外化（Entäußerung）は、ほぼ疎外と同じ意味で使用されている。この点については本稿の第一章（前号十四ページ）参照。
(13) "Grundrisse" S. 78.（訳、p. 81）。
(14) "Mehrwert" B. 26〈Ⅲ〉, S. 493,（訳、Ⅲ p. 647）。
(15) Ibid, S. 484, p. 636,

(16) "Kapital" Ⅲ, S. 275 (訳、p. 33)。
(17) Ibid, S. 838 (訳、p. 1063-1064)。
(18) Idid, S. 832 (訳、p. 1056)。

以上からして、つぎのようにいうことができる。すなわち、商品や貨幣が対象としての労働の疎外された形態だということは、こうした形態を生みだしている商品生産のなかに、すでにある種の「労働疎外」をみいだしうるということ、これである。ここに「ある種の」というのは、のちに考察するところの資本制的生産における「労働疎外」に比べて、未発展で端初的な形態だという意味である(なぜ端初的形態に留まるかという理由については、すぐのちにのべる)。

(二)

そこで今度は、「労働疎外」の端初的形態という観点から、あらためて、単純商品生産における人間的労働の転倒したありかたの種々の側面を考察することにしよう(説明にさいして、できるだけ反復をさけたいと思うが、すでに明らかにされた諸点との重復が多少とも生ずるのは、いちいち以前の叙述を指示する煩雑さをさけるという点からも、また、問題の性質上からもある程度やむをえぬこととして諒承されたい)。

一、「労働疎外」の端初的形態に関する第一の側面。さしあたりまず、単純な商品生産における人間的労働の転倒したありかたを、主として生きた人間労働の社会的有用性という点に力点をおいて表現するならば、それは、人間的労働が具体的な生きた労働としてはその社会的有用性を実証されえず、「物化」した形態になり、しかも交換におい

て他人に譲渡されたときにだけその社会的有用性を実証されるという点にあるといえよう。

生産手段が社会的に共有され、個々の労働力も最初から社会成員全体の管理下にあるばあいには、いうまでもなく生産の目的、対象、作業様式、手段、結果等々はすべて最初から社会的性質をおびており、諸成員の労働は、具体的な生きた労働それ自身においてその社会的有用性を明示されている。個々人の個別的労働過程がそのままで社会のための労働（社会的分業の一環）だということが実証されており、また、生きた労働がそのままで社会的有用性をもっているならば、その結果として生産物も有用性をもっている。

これに対して商品生産のばあいには、生きた労働は単なる私的労働であるにすぎず、その現実の働きぶりをみただけでは、はたしてその労働が社会的に有用であるかどうかは明らかになりえない。ここでは、社会諸成員は彼らの私的交換で始めて社会的接触をもつのだから、右の社会的有用性もまた、この私的交換を通じてのみ実証されざるをえない。ところがこの私的交換は、生きた労働自身の交換として行われてはいない。それゆえに、ここでは、生きた労働は「それ自体としては人間にとって外的なものであり、したがって譲渡されうるものである」[19]という物化した形態をとり、しかも、この物が他人のための使用価値として他人の手に譲渡されたときにだけその社会的有用性が実証されるのである。

しかもなお、この譲渡が円滑にゆくかどうかは、したがって労働生産物の使用価値が社会的に実証されるかどうかは、偶然にゆだねられている。かりにある特殊な具体的労働が、社会的分業の公認された一環だとしても、それだけではこの労働生産物の使用価値が保証されるとは限らない。たとえば、他の諸生産者によるこの種の労働で新種の生産物がつくられ、この生産物の使用価値によって社会的欲望が満されることになるならば、旧種の生産物は一掃され

てしまうことになる。マルクスの表現を借用すれば、「その労働（リンネル労働――引用者）は社会的分業の一環として実証されなければならない。しかし、分業は一つの自然発生的な生産有機体であって、その織物は商品生産者たちの背後で織られたものであり、またたえず織られている。……生産物は今日はある一つの社会的欲望を満足させるが、明日はおそらく全部または一部が類似の種類の生産物によってその地位から追われるであろう。……リンネルに対する社会的欲望、それには、すべての他の社会的欲望と同じに、その限度があるのであるが、それがすでに競争相手のリンネル織職たちによって満されているならば、われわれの友人の生産物は余計になり、したがって無用になる」[20]のである。

以上のように、人間の生きた具体的労働がそのものとしては社会的有用性を実証されず、「物化」した形態になり、しかも商品として交換され他人に譲渡されて始めて社会的有用性を実証されることになるという点に、単純商品生産における「労働疎外」の端初的形態の一側面がある。

(19) K. I, S. 102（訳、p. 117）。

(20) Ibid, S. 121（訳、p. 141）。

「労働疎外」の端初的形態に関する以上の側面を、つぎに、抽象的人間労働という点に力点をおいてとらえてみよう。このばあいには、「労働疎外」の端初的形態は、人間の主体的労働が価値物という商品の（客体の）ものになり、主体に対して「疎遠な」対象として自立化する点にある。この点においても、人間労働は商品の価値という対象化した形態をとらない限り、同じ人間労働の支出であるという社会的性格を表示しえないわけである。

なお、価値が個々の労働主体からは独立した「疎遠な」存在だということは、価値が生きた人間労働それ自身では

なく、また人間に直接属する性質ではなくして、人間の外部に存在する商品という物に固有の性質だということ、第二に、価値は個々の労働主体の現実的労働とは区別せられるところの、人間的抽象的な労働の結晶にすぎず、個々の生産者の私的諸労働が同じ単純な人間的労働へ還元される過程は、彼らの意志や行為ではいかんともなしがたい過程であるということ、第三に、価値（量）の運動は、個々の生産者のあずかり知らぬ生産諸条件の無数の変化の組合せによって規制され、彼らからは勝手で独自な運動をするばかりか、逆にこの運動によって彼らが制約されるということ、等々の意味においてとらえられる。(21)

ところでこれまでの諸点からすれば、商品生産においては、個々の生産者がどんなに汗水ながして「立派な」働きをしたとしても、その労働が商品という「物化」した形になり、しかもその商品が交換価値として実現されない限り、それは社会的有用物たりえぬことになる。したがって、生産者の右の労働も無駄な労働だったということになる。このことは、どんなに有用な労働の生産物であったとしても、それが市場で売れ残ったままになるならば、やがて腐ったり、錆びたりして使いものにならなくなるという日常の経験が実証しているとおりである。したがってまた、単なる商品生産の社会では、使用価値をつくる労働が有意義な労働なのではなく、もっぱら、価値をつくる労働のみが有意義な労働だということにならざるをえない。

(21)　「互いに独立して営なまれながらしかも社会的分業の自然発生的な諸環として全面的に互いに依存しあう私的諸労働が、たえずそれらの社会的に均衡のとれた限度に還元されるのは、私的諸労働の生産物の偶然的なたえず変動する交換割合をつうじて、それらの生産物の生産に社会的に必要な労働時間が、たとえばだれかの頭上に家が倒れてくるときの重力の法則のように、規制的な自然法則として強力的に貫ぬかれるのである。という科学的認識が経験そのものから生まれてくるまでには、十分に発展した商品生産が必要なのである。それだから、労働時間による価値量の規定は、相対的な商品価値の現象的な運動の

下にかくれている秘密なのである。それの発見は、労働生産物の価値量の単に偶然的な規定という外観を解消させるが、しかしけっしてその物的な形態を解消させはしない」(K. I. S. 89, 訳、p. 101)。その他、同巻 S. 120—121 (訳、p. 141—142) も参照。

二、「労働疎外」の端初的形態に関する第二の側面。それは、人間的労働そのものが自己目的としてでなく、[22] 私的「利益」を追求する手段になり、社会的労働が私的諸労働として——いわばそれに従属したかたちで——行われるというところにある。

この社会では、個々の生産者は自分の労働生産物を商品として生産し、これとひきかえにのみ他人から必要な生産物を取得することができる。彼がどれだけ自分の諸欲求を充足しうるかは、彼がどれだけの商品を生産し、それらがどれだけ多くの交換価値をもっていたかにかかっている。このように、彼らの諸欲求の充足がもっぱら私的労働と私的交換という彼ら個々人の私事にゆだねられているということは、彼らの労働が社会全体の利益ではなく、交換価値を唯一の目的としてのみ行われるということにほかならない。

そもそも、彼らは相互に独立(孤立)し分散した他人として存在しているにすぎず、社会的分業において全体がなにをどれだけ必要としているか、また全体の利益のために、一個人が当面なにをなすのが最適であるのか、ということは知るすべもないのであるから、ここでは、社会の総労働が私的諸労働の一全体としてのみ行われ、社会的労働がいわば私的諸労働に従属したかたちでのみ行われざるをえない。そしてこのことはまた、社会的総労働がまったく無計画的に行われ、莫大な労働が無駄にされているということなのである。

(22) 商品流通においては、「生産が、私にとって自己目的として現われず、手段として現われる、という意味がふくまれてい

る」（"Grundrisse" S. 111, 訳①、p. 116）。

三、「労働疎外」の端初的形態に関する第三の側面について。それは、労働時間によって度量される労働分量が商品の価値の大きさとして現われることにより、価値量の変化が、労働主体によっては制御しえぬようになるばかりか、その運動によって主体の「取り分」、したがって再生産のありかたが規定されるという点にある。

右の点に関しては、基本的にはこれまでの説明ではたされているので、ここでは二、三の注意をつけくわえておくことにしよう。

(イ)、いうまでもなく、生産にあたって生産物の分量を規定する契機には、人間の生きた労働力だけでなく、その外部にある物的諸条件もふくまれる。だから生産自体をみる限り、ある生産者により優れた客体的な生産条件が与えられるならば、その生産者は他と同じ労働力で同じ分量だけ働いても、より多量の生産物を生産することができる。

すでにのべたことから明らかなように、生産諸条件が社会的に所有されているある発展段階の社会においては、社会的総労働の配分および社会的諸成員への社会的生産物の分配は、直接に労働時間を尺度にして行われる。したがって、生産諸条件の改善による生産力の増加は、各成員の労働に応じて「平等に」配分される生産物量の増加にほかならず、各成員の労働時間が同一であれば、彼らの取得する生活手段分量の一様な増加として結果する。

だが商品生産社会では、種々の生産諸条件はすべて個々の私的生産者の所有下にあり、生産はばらばらに行われている。そして人間の労働分量が、商品という物の価値量になり、商品の価値の大きさを尺度にして、個別的生産者の「取り分」が決定されている。だから生産条件が違えば、たとえ同じ労働力で同じ時間労働しても、個々人の取得する生産物量が相違し、したがって個々の生産物にふくまれる労働量（価値の大きさ）が相違せざるをえない。もしか

りに、ある生産部門の一者に優秀な生産条件が与えられるならば、彼は同じ労働時間をより多くの生産物に対象化させうる――だから個々の生産物にはより少量の価値がふくまれている――が、市場ではこの個々の生産物の価値を、従来どおりの大きさの価値として妥当させうるから、彼は他人の商品をこれまでよりもいっそう多く獲得することができるであろう。

それゆえ、商品生産社会では、諸成員の社会的「分け前」の分量は、彼らの人間的欲求や必要度で決められるどころではない。それは生きた労働時間によって決るのでもなくして、むしろ彼らの外部にある物的諸条件の所有で決するということになるのである。

(ロ)、商品の使用価値が実証され、商品の貨幣への転化が行われるかどうかは偶然に依存していることはすでに明らかにした。だが、かりにこのことが行われるものと前提しても、その商品とひきかえにどれだけの貨幣が入手できるかは、再び偶然的諸事情に依存している。すなわち、価格の大きさは、商品の需要と供給の大きさによって変動するのであり、後者は、天候や災害、発明や発見、思惑や偶発的な社会的諸事件等々によって偶然的に変化せざるをえない。

さらに、こうした価格変動は、交換者間の「かけひき」と競争をとおしてのみ行われる。ある者の商品価格が騰貴すれば、他の者が損害をこうむる。また、その商品価格が暴落するならば、彼は窮乏化することにもなる。したがってこの社会では、一商品の価値の大きさがその生産にとって「社会的に必要な労働時間」によって決まるという法則は、一方では、個々の生産者にその生産諸条件と労働の質を改善させて生産力を向上せしめ、他方では市場における競争を激化させつつ、私的生産者の「分解」すら条件づけることになるのである（この点だけからでも、価値法則が

単なる平均的法則としてだけでなく、一個の発展法則として把握されねばならぬことがわかるであろう[23]。

（23）この点については、山本二三九氏の論文「経済学における形態規定とはなにか」において、すでに的確な説明が示されている（『立教経済学研究』第二四巻第三号、p. 107 参照）。

四、「労働疎外」の端初的形態の第四点は、「人格の物象化」と「物象の人格化」――つまり、一方では人間的労働とその社会的関連が物の属性として現われ、他方では、物が社会的な力をもつ主体として登場し、物と物とが独自な関連を結びあって勝手な運動を行なうということ――にある。

これまでの考察をふりかえってみれば、右の第四点は、第一点（人間の労働が商品という物の価値として自立するという面からつかまれた「端初的形態」）と、第三点（商品の価値量が独自な偶然的な変動をするという面で把握された「端初的形態」）とを、別の表現で要約しているものともいえよう。

ところで、商品という物が社会的な力を有するということは、さしあたり労働の社会的機能が、商品に固有な交換価値――それと引きかえに他人の一定量の生産物をもたらすという商品に固有の「力」――として現われることだといえよう。貨幣は、かかる「力」を端的にその素材（金）で一般的に表示するものにほかならない。

貨幣が、いつでも役立つところの絶対的な社会的富の形態という力をもちうるのは、この社会体制が、商品価値という物的形態を媒介にしないでは私的労働の社会的性格を実証しえぬ体制だからであり、貨幣によらないでは私的労働の社会的性格を一般的に表示しえぬ体制だからである。換言すれば、貨幣がかかる力を有するのは、商品生産者たちが、彼ら自身の労働の社会的力能を彼らから独立する物として彼ら自身から疎外しているからである。

それゆえ、この社会では、商品、貨幣という物の力が人間生活を規定しているのであり、また、これらの物の社会

的力能あるいは機能が、人々をしてその代弁者たらしめているのである。

たとえば、商品の売買契約は、たしかに人間の意志関係あるいは法的関係である。しかしこのばあい、人間は経済的関係に制約され、相互に商品や貨幣の代理者としてだけ生存権をもっているにすぎない。彼らは経済的関係の人格化でしかなく、この関係の担い手として相対しているだけである。たとえばまた、貨幣蓄蔵者が黄金物神のために、多大の人間的欲求を犠牲にするのも、彼が蓄蔵貨幣機能の代弁者にほかならぬからである。さらにたとえば、債権、債務という信用関係にともなう担保は、右の信頼関係が経済関係に規定された信頼関係であり、人間への信頼というよりも物への信頼でしかないということを示している。われわれは、次節では、資本家が人格化された、意志と意識とを与えられた物＝資本にすぎぬことをみいだすであろう。

なお、商品生産社会における労働生産力の発展は、商品生産者たちの貨幣への依存をいっそう深める点で、貨幣の力の増大として現われるといってよい。なぜなら、社会的分業の発展と相互促進関係にある労働生産力の発展は、生産物の質の多様化と量の増大をもたらし、それらの生産物をますます交換にひきいれ、これら生産物の価値を貨幣で表現する必要を増大させるからである。そしてこのことは、他方では、個人のポケットに貨幣という物の社会的な力が集中することを可能にし、同時に他の人々から、それが喪失してしまうことを可能にする。

五、「労働疎外」の端初的形態の最後の側面は、社会的分業における人々の相互依存性と独立性が、物への依存と従属として現われ、彼らにおける対立と競争の関係として現われ、さらに交換関係（その内部および外部）における個性、人格への無関心として現われる、という点にある。

前述したように、この社会では、人々は種々の相異なる使用価値を提供しあう点で相互に依存せざるをえぬ関係に

あるが、この関係は、この社会においては商品や貨幣という物的形態への人々の依存と従属として現われざるをえない。あるいはまた、私的生産者の独立性が、「全面的な物的依存の体制」によって補われざるをえない（この原因については、すでにこれまでの説明で明白にしたとおりであるからくり返さない。ただ、マルクスの一叙述を引用しておくに留める）。

「分業体制のうちにそのばらばらな四肢（membra disjecta）を示している社会的生産有機体の量的な編成は、その質的な編成と同じに、自然発生的で偶然的である。それだから、われわれの商品所持者たちは、彼らを独立の私的生産者にするその同じ分業が、社会的生産過程とこの過程における彼らの諸関係とを彼ら自身から独立なものにするということを発見するのであり、人々の相互の独立性が全面的な物的依存の体制で補われていることを発見するのである」（K. I. S. 122, 訳、p. 143）。

他方、価値の面でみても、生産者たちの関係は、相互の生産物を交換価値として較量しあい、少しでも自己の商品を大きい交換価値として妥当させようとする対立と競争の関係として現われざるをえない。販売者と購買者との関係にしても、一方の得は他方の損である。

またこの社会では、等価物交換者としての個人的人間的特性への無関心だけでなく、交換関係に入ってこない人間への無関心が特徴的である。いうまでもなく後者は、当の生産者個人にとっては交換関係を結ばぬ人々が自分の得失になんの影響も及ぼしえないこと、また当人は、いわばわき目もふらずに自分の私的利益を目指して生産にはげみ、市場できびしい競争にうちかってゆかねばならぬということによって規定されている。いままで交換関係を結んでいた相手に対してすら、取引きが終れば無関心が支配する。「金の切れ目が縁の切れ目」なのである。

なお、さきに個々人の独立性が物への全面的依存の体制で補われているとのべたが、この独立性はまた、自然発生的な社会的分業において、個々人が分散化された特定の生産手段に緊縛化され、細分化された特殊な職業に固定化されていること、したがって、マニュファクチュアにみられる労働の一面化や人間自身の細分化とは区分されるとはいえ、生産者の「ある種の精神的肉体的不具化」[24]と結びついているといえよう。

(24) K. I, S. 384 (訳、p. 476)。旧来の社会的分業における「人間の精神的肉体的不具化」や「労働の一面化」という作用は、私的所有と結びつく自然発生的分業を廃止し、共産主義的生産様式をめざす者にとっては特に注意されねばならない。なぜなら、たとえ資本家的生産様式を廃止しえても、多少とも旧来の社会的分業が存在する限り、「人間と労働の分割」が残り、個々人を全面的に発育した人間として形成することが阻害されうるからである。この点については、いずれ詳しく扱うことにしたい。

(三)

以上の諸点が、単純商品生産における「労働疎外」の端初的形態の諸側面である。

まことにこの社会にあっては、人間の産物であり人間に属する生産物が、人間の意のままにならない独特の「力」を有する物として人間から自立化し、彼らを制御するのである。人間的な機能や諸契機がすべて貨幣の力に対して影をうすめ、人間生活のすべてのことがらが人間的欲求や必要度で尺度されずに、貨幣の力によって尺度され、貨幣の所有いかんによって規定されるのである。[25] こうした転倒性は、すでに昔からのことわざにもよく示されている。曰く。「地獄の沙汰も金次第」、「金があれば馬鹿も旦那」、「金は三欠くとたまる」(義理、人情、交際を欠くこと)、「金の切れ目が縁の切れ目」、等々。

(25) 商業新聞に、わが国で毎年じん蔵病で死亡する人々のうち、五千人以上の人々は、人工じん蔵の治療をうければ助かるのに、月々三十万円以上する治療費が払いきれないために死亡しているのだという記事が掲載されていたことがある（朝日新聞一九七一年六月六日号）。今日までは、財布の底をはたいたり、借金を重ねたりしてなんとかわが子に人工じん蔵治療をうけさせてきたが、これからはどうしようもなくなってしまった親たちの心情は察するにあまりある。ここには、貨幣がなくては生命さえ維持しえぬという、どの商品社会にも共通する「原則」が文字どおりに示されているわけである。

なお、以上からすれば、商品の物神的性格と商品における「労働疎外」の端初的形態とは、ともに商品生産における人間的労働の転倒したありかたの同じ内容を示すものだということが確認できる。ただし、このように両者が同じことだといっても、それはこれまでにみてきた限りでいいうるのであって、「労働疎外」というばあいには、労働者自身の立場に立って彼の現実的労働のありかた・資本制的生産の発展における彼の運命如何・を究明するところに視点がおかれている（この点ではそれは、資本制的生産様式の運動法則の一面を示すにすぎない）のに対して、「物神性」のばあいには、物のあらゆる経済的形態規定の解明そのもの――最も簡単な関係から最も複雑な関係にいたるまでの全生産諸関係の物化と独立化、神秘化の解明、したがってまた全ブルジョア経済学の批判――を眼目にしている。この視点の違いは、前者が『資本論』第一巻の範囲でおおよそ解明されうるのに対して、後者は第三巻の「利子生み資本」にいたるまでの全範囲において解明されることを要求する点にも現われているといえる（『資本論』で「労働疎外」論が展開されていることを例示する叙述として、「利子生み資本」の部分から「利子が生産関係の最も疎外された形態」だという叙述がしばしばひきあいにだされるが、これでは、物象の疎外された形態すなわち経済的形態自身の究明がすべて「労働疎外」論だということになり、「労働疎外」論に独自の課題なり観点があいまい化されてしまうおそれがある。あらかじめ注意までに付言しておく）。

（四）

つぎに、以上の諸点が、「労働疎外」の端初的形態として特徴づけられる理由について考察しておかねばならない。

要するにその理由は、ここで扱われている商品生産が資本制的商品生産ではなくて、単純な商品生産であり、このもとでの労働主体、生産手段の所有、労働過程、生産物の領有等々の性格が、資本制的商品生産におけるそれらの性格とは質的に相違しているからである。もう少し詳しくみてみよう。

労働主体について。純粋にみれば、労働主体はすべての人身的束縛や経済外的強制をうけていない自由な人格であり、独立した私的生産者である。「独立の商品生産者たちは、競争という権威のほかには、すなわち彼らの相互の利害関係の圧迫が彼らに加える強制のほかには、どんな権威も認めない」[26]のである。

(26) K. I, S. 377（訳、p. 466）。

生産手段の所有について。私的所有は、生産手段が独立した私人の所有物であるばあいに存在するが、この私人が直接的な生産者か否かによってその性格も違わざるをえない。

すなわち単純商品生産を特質づける私的所有は、個々の生産者が生産手段を私有している点で本来的な私的所有であり、直接的生産者が生産手段を所有せず非生産者たる資本家がこれを所有する資本家的所有とは根本的に区別される。前者において、労働力が商品に転化せず、労働主体が資本家階級に従属化していないのも、彼のもとに生産手段が存在しているからである。

なお、単純な商品生産として現われる社会的分業が、分散し独立した私的生産者たちによって行われているということは、諸個人のもとに生産手段が分散化されており、個々人は自分のもの以外には、その充用なり処分についていっさい容喙しえないことを意味している。そして、このことはまた、彼らのもとにある生産手段が、個人ないし小集団でのみ使用しうる小規模なものであり、かつ、ある個人のもとへの生産手段の大量的集積が排除されていることを条件づけている。

労働過程について。労働は独立した私的労働としてのみ行われる。生産者は、自分の「利益」を目的とし、自分の計画と判断にもとづいて、自の仕事場で彼の労働手段や材料を充用して働く。彼は、命令や指揮、監督をうけて働くのではない。技術的制約を別にすれば、労働時間の配分も彼の意志で決められ、また作業の手順、生産物の質や量の選択もすべて彼の意志で決められる。労働における彼個人の創意なり工夫も自由に発揮されうる。要するに、労働諸条件にせよ労働過程そのものにせよ、それらはすべて労働主体の管理下におかれ、主体のもとに包摂されている。われわれはやがて、資本制的生産においては、労働過程自身が資本のもとに包摂され、この過程における労働主体の独立性が支配と従属性に転化することをみるであろう。(27)

(27) 資本主義的生産様式が支配する社会では、「……生産過程における支配、隷属関係が、以前の生産過程における独立性に代って現われる。この独立性は、たとえば、すべての自営農民や、国家なり地主なりに生産物地代を支払うだけでよかった借地農や、農村的家庭的な副業や、独立手工業のばあいに存在したものである。だから、このばあいには、生産過程における以前の独立性の喪失があるのであって、支配・隷属関係は、それ自体、資本主義的生産様式の導入の所産なのである」（"Resultate" S. 475, 訳、p. 94）。

他方、労働過程のこうした特質は、つぎのことを内包している。すなわち、この過程が個人的で小規模なものであ

って、多人数による協業や分業がこの過程に導入されないということ、労働過程の技術的基礎が手工業的であるということ、労働の成果は、生産者が作業するさいの力、熟練、速度、正確さなどに依存していること、等々である。したがって、本来的私有にもとづく単純な商品生産は、小経営を特徴とし、生産の社会化を排除する傾向をもたざるをえない。マルクスのつぎの叙述は、以上の諸点を的確に要約したものである。

「労働者が自己の生産手段を私有しているということは小経営の基礎であり、小経営は、社会的生産と労働者自身の自由な個性との発展のために必要な一つの条件である」、この生産様式が「繁栄し、全精力を発揮し、十分な典型的形態を獲得するのは、ただ、労働者が自分の取り扱う労働条件の自由な私有者であるばあい、すなわち農民は自分が耕す畑の、手工業者は彼が老練な腕で使いこなす用具の、自由な私有者であるばあいだけである。この生産様式は、土地やその他の生産手段の分散を前提する。それは、生産手段の集積を排除するとともに、同じ生産過程のなかでの協業や分業、自然に対する社会的支配や規制、社会的生産諸力の自由な発展を排除する。それは生産および社会の狭い自然発生的な限界としか調和しない」(K. I, S. 789, 訳, p. 993)。

生産物の領有について。一般的には、経済学において「領有」ないし「取得」(Aneignung)とは、人間が一定の社会的諸関係のもとで自然に働きかけ、自然をわがものとすることである。したがって、この意味では、労働過程は自然の領有過程にほかならない。[28]

(28) 「生産とは、すべてある一定の社会形態の内部で、また、その媒介によって、個人の側からする自然の領有である」(“Grundrisse” Einleitung, S. 9, 訳, p. 9)。

「……単純な抽象的な諸契機についてのべてきたような労働過程は、使用価値をつくる合目的活動であり、人間の欲望を満足させるための自然的なものの取得であり、人間と自然とのあいだの物質代謝の一般的条件であり、人間生活の永久的な自然

条件であり、したがって、この生活のどの形態にもかかわりなく、むしろ人間生活のあらゆる社会形態に等しく共通なものである」(K. S. 198, 訳、p. 241, 傍点—引用者)。

商品生産のもとでは、領有はいわば二重に現われる、つまり、第一に生産者が自分の労働によって特定の生産物を領有する点で、第二に、他人へのこの生産物の譲渡を媒介にして他人から諸生産物を領有する点で、二重に現われる。(29) このばあいには、他人の諸生産物を領有する支配的形態は「譲渡」として現われるが、それはまた、まえもって生産者が生産物を自己労働によって領有していることを前提にしているから、自己労働が他人の生産物領有の基礎をなし、領有の本源的方法として現われる。これに対して資本家的領有法則は、のちに考察するようにこれとは正反対の性格をもっている。このばあいには、自己労働による生産物は他人によって領有されてしまうのであって、労働と領有との直接的結びつきが切断され、労働過程が同時に生産物の疎外、喪失として現われることになる。

(29) 『要綱』では、右の第一の意味での領有が本源的領有としてつぎのようにのべられている。

「だから諸商品の成立過程、したがってまたその本源的領有過程は、流通の彼岸によこたわっている。しかし流通を通じてだけ、したがって自己の等価物の譲渡によってだけ、他人の等価物を領有することができるのであるから、自己の労働が必然的に、本源的領有過程として想定され、そして流通は実際、多様な生産物に化身した労働の相互的交換としてだけ想定されている。したがって、労働と自己の労働の成果の所有とは、それなくしては流通を通じて第二の領有が行われないような根本的前提として現われている。自己の労働のうえにうちたてられた所有 (Eigentum)が、流通の内部で、他人の労働の領有の基礎を形成している」(Ibid, S. 902, 訳〈V〉、p. 1022-1023)。

単純な商品生産にもとづく労働の転倒したありかたが、「労働疎外」の端初的形態として特徴づけられる理由は右のとおりである。単純な商品生産が資本制的商品生産へ転化するのに応じて、右の端初的形態もより発展した形態に転化する。

（五）

最後に注意すべき点は、以上にみてきた労働の転倒したありかたを通じて、労働の社会的性格、労働の生産力が発達せしめられるという点である。

商品における労働の二面性がいっそう分裂したかたちで表示されるということは、一方では、労働がいっそう他人のための使用価値をつくる労働という性格をおびることであり、生産者相互の依存性が強化され、彼らの欲望の多面化と個性の発育がうながされることにほかならない。他方では、ますます多くの労働が同じ交換価値をつくるための労働になり、労働の普遍的、社会的性格が発展するということにほかならない。

さらに、労働が独立した単なる私的労働としてしか行われえないということは、その労働が人身的強制労働から解放された「自由な」労働であり、強制的労働にくらべて生産者の労働への関心、積極性、創造性を高める諸契機をふくんでいるということを表わしている。

社会的総労働の細分化と固定化、労働過程の手工業的性格、生産手段の分散化と生産者のそれへの緊縛等々を通じて、生産者における「ある種の肉体的精神的不具化」が生ずるが、このことを通じて、労働の熟練が高められる。

商品生産者たちの関係が、競争と対立として特徴づけられるならば、その競争と対立こそ、彼らをして他人との競争に勝利するために労働用具を改善させ、情報や交通を発展せしめるのである。

商品生産が、いわば「物による人間支配」として特徴づけられるとすれば、この商品生産はまた、「自由、平等、所有、そしてベンサム」という法的諸契機の現実的土台をなすのである。

以上要するに、商品生産における「労働疎外」の端初的形態に関する諸側面は、同時に、その裏面では労働生産力の発展をうながし、労働の社会的性格を発展させる諸契機なのである。したがって、「労働疎外」の端初的形態は、生産の社会化への人間的労働の発展行程における必然的な一通過点を表わしている。(30)

(30)　以上から明らかなように、「労働疎外」の端初的形態は、商品生産の発展法則という観点から究明されねばならない（この商品生産の生成と発展に関する諸法則は、これまでの考察においても種々の面から明らかしたとおりであるが、当面とくに大切な点は、商品生産がその発展において必然的に労働生産力を高めつつ旧来の生産様式を解体させる方向に作用し、資本家的生産様式をうみだざざるをえないという点である）。

ところで、右の単純な商品生産の発展法則は、つぎのこと――つまり、単純な商品社会の生産様式が小経営を特徴とし、そして小経営はまた、社会的生産力の自由な発展を排除するということとは、どのように統一的に理解すればよいであろうか？一方で小経営が、種々の点で社会的生産力の自由な発展を妨げることは、すでにみたようにたしかな事実であって、このことは、単純な商品生産がつねに補助的な生産関係に留まりつつ、幾千年にもわたって永続してきたことによっても表現されている。

だが、種々の歴史的形態や偶然的作用をはぎとって、長期間の商品生産の歴史的過程に貫ぬいている基本的で必然的な傾向を抽出するならば、諸小経営は、私的所有と自然発生的分業を「ふくんでいる」限りでは、必然的に商品経済に依存せざるをえず、その発展の一定段階で貨幣をうみだしつつ、生産力を発達させる刺激をうけとるようになること、やがてそれは、この生産様式とそのもとで徐徐に発達してくる社会の生産力との矛盾を深め、ついには資本家的生産様式にとって代わられることが確認されるのである。マルクスが、右の歴史的傾向を、『資本論』第一部の終りでつぎのように要約しているのは、周知のところである。

「この生産様式は、土地やその他の生産手段の分散を前提する。それは、生産手段の集積を排除するとともに、同じ生産過程のなかでの協業や分業、自然に対する社会的な支配や規制、社会的生産力の自由な発展を排除する。それは生産および社会の狭い自然発生的な限界としか調和しない。……ある程度の高さに達すれば、この生産様式は、自分自身を破壊する物質的手

段を生みだす。この瞬間から、社会の胎内では、この生産様式を桎梏と感ずる力と熱情とが動きだす。この生産様式は滅ぼされなければならないし、それは滅ぼされる」（S. 789, 訳、p. 993-994）。

一九七一年九月十五日

〔訂正〕　前号（第二五巻第二号）の目次で第二章の序節表題〝『資本論』とその諸草稿における「労働疎外」の規定〟は、〝『資本論』の諸草稿における「労働疎外」の規定〟の誤植につき訂正。および、同号七ページ十行目の「啓発的彼割」は「啓発的役割」の誤植につき訂正。同目次第一節〝商品生産における「労働疎外」の可能性〟は〝商品生産における「労働疎外」の端初的形態〟と訂正。同目次第二節〝「労働疎外」の現実的諸過程〟は、〝「労働疎外」の現実的展開過程〟と訂正。